

いつれの後附より 桐壺更衣の御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。はじめより我はと思ひあがり給へる御方々、めざましきものに貶しめ嫉み給ふ。同じ程、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。朝夕の宮仕につけても、人の心を動かし、恨を負ふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、物心細げに里がちなるを、い

いつれの後附より 桐壺更衣の御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。はじめより我はと思ひあがり給へる御方々、めざましきものに貶しめ嫉み給ふ。同じ程、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。朝夕の宮仕につけても、人の心を動かし、恨を負ふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、物心細げに里がちなるを、い

いつれの後附より 桐壺更衣の御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。はじめより我はと思ひあがり給へる御方々、めざましきものに貶しめ嫉み給ふ。同じ程、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。朝夕の宮仕につけても、人の心を動かし、恨を負ふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、物心細げに里がちなるを、い

の母桐壺更衣の時めき多し事  
とすの言まふより 此発端の  
詞ハ伊勢の家集よいつまの由  
時より是らんかかまやと云  
吹る由局よ大和親あつらん  
さうひよりととありは  
ゆかり但家集ハ多  
帝の時七条の存よいせの  
師のまやづんせと云  
がめとて産くくちり此物  
がより桐壺の帝と云  
く感言ははらうりとい  
と重ハ他物集られ其時  
といまとやなまにの  
ふよりうら橋よ言あ  
んハ伊勢の家集の福  
と用ひて心とく人より奇  
かたハ 雲々伊勢集  
ハその身のやととハ  
紫式アハ時代とハハ  
用ひて其心各別也是依  
者の抄骨也たハ他の詩  
ハ漢玉のまよとて唐と

いつれの後附より 桐壺更衣の御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。はじめより我はと思ひあがり給へる御方々、めざましきものに貶しめ嫉み給ふ。同じ程、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。朝夕の宮仕につけても、人の心を動かし、恨を負ふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、物心細げに里がちなるを、い

いつれの後附より 桐壺更衣の御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。はじめより我はと思ひあがり給へる御方々、めざましきものに貶しめ嫉み給ふ。同じ程、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。朝夕の宮仕につけても、人の心を動かし、恨を負ふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、物心細げに里がちなるを、い

いつれの後附より 桐壺更衣の御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。はじめより我はと思ひあがり給へる御方々、めざましきものに貶しめ嫉み給ふ。同じ程、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。朝夕の宮仕につけても、人の心を動かし、恨を負ふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、物心細げに里がちなるを、い

源氏物語湖月抄 (本書底本)

いつれの後附より 桐壺更衣の御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。はじめより我はと思ひあがり給へる御方々、めざましきものに貶しめ嫉み給ふ。同じ程、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。朝夕の宮仕につけても、人の心を動かし、恨を負ふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、物心細げに里がちなるを、い

【訳】 多大的の大御代であったか、女御や更衣が数多お仕え申上げなされた中に、大して高貴な身分ではない方で、抜群に、時に合って榮えていらしやる「帝寵をうけている意」方があった。(宮仕に上った抑々の) はじめから、「自分こそは(必ず御寵愛を得るだろう。)」と思ひ上ったことを考え、ていらしやる御方々「女御方」は、(この方を) 意外なものとしてさげすみ、(且つ) うらやみにくみなさる。(この方と同じ身分、(又は) それより低い身分の更衣たち「以上によつて、この方は下臈でない更衣であることが判る。これを桐壺更衣という。以下更衣と呼ぶ。)」は、なお更心穩かでない。(こうして) 朝夕の宮仕につけても、人「他の女御更衣方たち」の心を動搖させ、(その) 恨みを身に受けたことが積り積ったせいであったであろうか、大層病身になっていて、何となく心細そうな様子で里「実家」(に引籠り) がちであるのを、(主上に於かせられては) 層一層極めてふびんなものとお思ひになって、(心の余裕もあらせられぬままに) 人の譏をも氣兼ねあそばすこともおできにならず、まさに世間の(溺愛